

孟蘭盆会のころ

院代 安藤嘉則

今またオウム真理教のことが話題となっています。地下鉄サリン事件など、この教団が起こした事件も、もう三十年近くも前のこととなりましてが改めて、宗教の恐ろしさを感じます。

実は私は、オウムの人々との交流のあった或る宗教学者と議論したことがあり、帰りの電車の中でも一緒にになり、オウムのことも話題にしました。その方はオウムの若者について「彼らは真面目すぎた。

馬鹿正直だった」などと感想をもらしておられました。

若い頃は誰しも心が不安定な時期があります。社会の矛盾、対人関係、異性関係等々さまざまなことにより悩み苦しみ、心がかなり動揺します。そういう時期に宗教は、苦しむ若者にとって大変魅力的に見えるのでしょうか。

こうした悩める若者たちが、宗教に関心をもち、宗教書を読んだり、宗教団体のセミナーなどに行くこと自体が

すべて悪いわけではありませぬ。しかし、オウムの人々が求めていたのはあくまで自分だけの安心（あんじん）でした。この自分だけの安心や幸せを追求する余り、人の命の尊さが見えませんでした。そればかりか、幼い子どもさえも平気で殺すようなことが出来たのです。

自分がやっていることが、おかしいという感覚さえ、宗教的救済の下では欠落してしまっただけです。

オウムでは、ポアというチベット語が使われました。これはチベットの経典に書いてあります。しかしこれを殺人肯定する思想にすり替えま

す。

すなわち坂本弁護士のような教団に対立する人々は、悪い業を積んでいるのであり、そのような人々を殺すことは、悪業を停止させ、よき来世に送る行為として殺人を正当化してしまっただけです。それでもその家族まで殺めるとは、人としてそれだけはやってはならない最低の行為であります。他者を顧みず、自分のことしか考えない宗教ほど恐ろしいものはありません。たとえばISなどに見られたように宗教がさまざまな紛争と混乱をもたらし、人の命を奪っている現在です。

我々のいのち、一人一人の命はかけがいのない尊いものです。そしてその命は多くの家族、そしてその前提にご先祖様の存在があります。

日本人は、こうした命のつながり連鎖を大切にしてきました。その代表的な行事が孟

特別志納者の紹介

伍 万円也	為年回供養	上 島 権守	伍 万円也	為年回供養	下 島 井上	清隆
壹拾万円也	為年回供養	下 島 井上 訓	伍 万円也	為年回供養	下 島 辻村	晃治
壹拾万円也	為年回供養	上 島 山田 英男	壹拾万円也	為年回供養	上 島 井上	政則
壹拾万円也	為 大練忌	中家村 小澤 稔	壹拾万円也	為 大練忌	中家村 小野	修一
壹拾万円也	為年回供養	榎本 石井 正浩	壹拾万円也	為年回供養	中家村 辻村	純夫
伍 万円也	為年回供養	上 島 大津 昭雄				

蘭盆会だといえましょう。

この行事の由来は、『仏説孟蘭盆経』というお経に書いてありますが、このお経に基づいて、日本では、お寺などで孟蘭盆会の法要がなされて、檀信徒の皆さまもご先祖のお墓参りをいたします。私たちの「いのち」は多くのご先祖さまの「いのち」から受け継がれたものです。まず、私の「いのち」は父

と母の両親二人からいただきました。その両親には、それぞれ両親がいるので、祖父母は四人となります。その祖父母にもそれぞれ両親がいるので、曾祖父母は八人となり、こうして十代もさかのぼりまして、一〇二四人ものご先祖様がいらっしゃるようになります。

そして、これらのご先祖様のほとんどの方々の顔を私達には知ることはありません。

しかし、そのうちの一人でも欠けてしまうと、今の私の「いのち」はありません。

つまり無数のご先祖さまの「いのち」をいただいで今の私があるのです。

「お盆」という行事は、この世に生命を受けた幸せに感謝し、ご先祖様、祖父母の方々、ご両親からつながっている命の大切さを思い起す大切な機会なのです。

ご逝去の方々と命日

・故 辻村 辰次 様

行年 七十八歳
平成三十年四月二十一日没
下島 施主 辻村 伸次 様

・故 井上 郁恵 様

行年 八十一歳
平成三十年五月十一日没
中家村 施主 井上 誠 様

・故 松本 房江 様

行年 八十二歳
平成三十年六月八日没
南足柄市 施主 松本 美雪 様

・故 小澤 耕一 様

行年 九十歳
平成三十年五月九日没
藤沢市 施主 小澤 喜久子 様

・故 小宮 薫 様

行年 七十八歳
平成三十年五月十八日没
中之名 施主 綾部 良英 様

・故 小宮 幸子 様

行年 八十歳
平成三十年七月十九日没
榎本 施主 小宮 好徳 様



大本山總持寺で修業を終え、施食会であいさつをする住職の孫 安藤正隆師